
肉体はつかれない

ふなむし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

肉体はつかれない

【Nコード】

N1493W

【作者名】

ふなむし

【あらすじ】

疲れ切った男に降りかかる災難。

「俺に力があれば……」。後藤はつぶやいた。

一話

肉体は疲れない。本当の意味で“疲れた”という決断を下すのは精神だ。

肉体的な苦痛の蓄積が疲労のトリガーとなることはあるとしても、それだけで“疲れ”を生じさせることはあり得ない。

朝8時からわずかな休憩をはさみ働き続け夜10時まで残業して、へとへとになりながら帰路につくその時、「もう駄目だ」と弱音を吐くのは心だ。

月に6日しかない休日を返上し、息子の運動会で親子参加リレーを走るとき、足が引きつりそうになりながら「三十半ば、俺もそろそろ年かな……」と体力のなさを嘆くのは肉体ではない。

後藤弘文はまさにそう意味において“疲れて”いた。

机の上には借金返済を旨とする督促状が散乱し、その中にはガス・電気代の請求書も紛れている。

先々月には電気が、そして、先月はガスが止まった。最後のライフラインである水が止まるのもそう遠くはないだろう。

いくらお金を切り詰めても、借金は減らない。

それどころか、別れた妻に息子の養育費を送金するため、借金はかさむ一方だ。

俺のこんなみじめな生活を誰かが見たら、何故ライフラインを止めてまで養育費を捻出し続けるのか、と訝るに違いない。

養育費は俺と息子をつなぐ最後の砦なのだ。養育費を送金しなければ、たちどころに息子への面会権は剥奪されてしまう。

五年もの間、元妻の指定した金額で養育費を払い続けて、最近では

ようやく息子の運動会にまで参加できるようになった。

今さら、送金をやめることなどできない。

息子は俺の生きがいなのだ。

それを奪われることは、死ぬことより辛い。

いや、お金を用意できなくなったとなれば、俺は自ら死を選ぶだろう。

しかし実際、後藤にとって差し迫った問題というのは借金の督促状でも息子への養育費でもなかった。

本日、深夜、いつも利用している銭湯から帰ってきた際、玄関のドアにアパートの大家を差出人とする手紙が挟まっていた。そこには、達筆な文字でこう書かれていた。

「家賃は三カ月前から未納のまま。

加えて、近頃では深夜になるとあなたの部屋から轟音が鳴り響いてきます。

アパートの住民からも少なからず苦情の声が届いています。

申し訳ありませんが、こちらとしましては、あなたにはアパートを出て行ってもらおうと考えています。あなたの出来る範囲で、しかし出来る限り早急にこの部屋から立ち退いて下さい。

立ち退かない場合は法的措置も辞しません」

高校を卒業してから今まで、それこそ古女房のように共に付き添い一緒に人生を歩んできたこの部屋。

ここから立ち退かなければならないという厳然とした事実、後藤から残り少ない心の余裕をはぎ取り絶望させるには、十分すぎるほどの効力を持ちあわせていた。

事実、後藤は手紙を掴んだまま何時間も茫然と立ち尽くしている。

俺に“力”があつたら……、後藤は思う。

妻を魅了して離さない美貌があつたなら、俺は離婚などしなくて済んだに違いない。

俺に絶えることのない資金があつたなら、生活にこと欠くことなどなかった。

……それに、息子の養育費だって。

先の見えない未来という壁に風穴を開けて、閉塞した今を変える“力”。

——もし僕がスーパーマンだったら。

後藤はまだ小さい時分、布団に入り眠りに着くまでのわずかな時間を使い、夢のような世界を想像し自らをあてはめた。

——学校なんて遅刻するわけない。だって、小学校まで得意の瞬間移動でひとつとび。

——運動神経は抜群。幼馴染のミナちゃんも、タカシのことなんてほっという僕にメロメロになるに違いない。もちろん、ミナちゃんだけじゃない。学校中の女の子全員が僕に惚れる。

——透明人間になったり、透視能力を使えばエッチなことだってできる。僕の前じゃ、ヨウコ先生も素っ裸だ。

——今みたいに、いじめられることだってなくなる。アキラもジロウもミチコもタカシも許さない。絶対に許さない。僕の苦しみを十倍にしてお返ししてやる。

大人になった今、後藤はその子供じみた遊びについて忘れてしまっている。

昔のように、布団に入って気づいたら寝てしまっているということもなくなった。

いや、むしろ、寝なくなつていいとさえ最近では思っている。

寝るのが怖い。そして、明日が来るのが怖い。

後藤は銭湯の自動販売機で買っておいた缶コーヒーを、一口で煽るように飲み干した。

空腹の腹になみなみと液体だけ溜まっているのが分かる。

そういえば、今日は昼飯、抜いたんだっけ……。

口の中にこびりついたミルクが、今日はやけに甘く感じられた。

布団にもぐりこんでも、しばらく目が冴えた。このまま時間など止まってしまえばいいのに。後藤は思う。

二話（前書き）

三日ほど前から吐き気が止まらない。何故だろうか、男は記憶を掘り起こす。

銭湯で買った缶コーヒ―。その日、後藤は悪夢を見た。

二話

三日ほど前から吐き気が止まらない。

胃に残った残留物が喉を介して嚥えた匂いを放ち、そして、また胸を悪くさせる。

このひっきりなしの悪循環がこのところずっと続いている。

頭痛と悪寒もあるので、風邪かと思い体温計で熱を測るが、とくに異常はない。

正体不明の不調。

この奇病を患ってから、朝食も昼食もまともにとった記憶はない。食事をとったところで、どうせ吐いてしまうにちがいないからだ。

——食中毒かもしれない。

三交代の勤務中、燃えさかる溶鉱炉をぼんやりと見つめながら、後藤は小さくつぶやいた

のぞき窓から見える内部では、2000度以上の高温で鉄鉱石とコークスが焼かれている。

赤く滲むスラグがどろどろとこぼれ落ちていた。

思い当たる節がないわけではない。

思い返せば、ちょうど三日前、銭湯でひと風呂浴びた帰り、いつものように表の自動販売機で缶コーヒーを買った。

しゃがみ込んで取り出し口から缶コーヒーを取ろうとしたら、何故かふたつあることに気付いた。

同じ銘柄がふたつ。缶が上下に重なり、取りだし口で聞えている。

上が俺の買ったコーヒーだとすると、下は誰かが置き忘れたもののなのだろうか。

「ラッキー」

俺はその時、たしかそんなことを言ったような気がする。切り詰められるモノは何でも切り詰める。

そんな中、ただ唯一の例外があった。風呂上がりに買う缶コーヒー。家に帰ってから飲む甘く冷えたコーヒーが、乾ききった体に染み込んで、その日の疲れを忘れさせてくれる。

その時ばかりは、つらい現実から目をそむけることができた。

そんな缶コーヒーがふたつ。目の前に転がっている。

俺には初めから選択肢などなかったのかもしれない。

毒の危険性など考える余地もなく、ふたつの缶コーヒーをスウェットパンツの両ポケットにひとつずつ忍ばせた。

その日は不思議と良く眠れた。布団にもぐり込んで、須臾の間も置かず俺は意識を失った。

そして、とても久しぶりに夢を見た。

夢の中で俺は怪物になっていた。

舞台は……、小学校だっただろうか。

俺は子どもたちを追いかけてまわっていた。

目的は……、恐らく彼らを食べる為だろう。

年端もいかぬ小学生たちは悲鳴を上げ、逃げまどい、そして……。

俺は俺が握りしめている“それ”に気付き慄く。

俺は幼馴染のミナを食べていた。

とても甘い味がしたのを覚えている。

俺はその事実に愕然とし……。

——いや、それは嘘だ。

ただ歓喜していた。

“それ”がミナだと知りながら、俺は喜んでミナを食べていた。俺自身に圧倒的な力が備わっていることに満足し、そして、ミナを自分の中に取り込むことに得も言われぬ高揚感を感じていた。

溶鉱炉の中でコークスがパチパチと火花を散らしている。

割れたコークスがパツとのぞき窓のガラスにぶつかって、消えていった。

止めることだって出来たはずだ。それなのに、俺は……。食べた。幼馴染を。

「おい。大丈夫か。お前、顔真っ白だぞ」

声をかけてきたのは同僚だった。

「ああ、ちょっと具合が悪くてな。もしかしたら、食中毒かもしれない。」

「それはよくないな。最近ノロウイルスが流行ってるらしいし、気をつけた方がいい。まあ、とにかく、そろそろ交代の時間だ。今日は、帰って大人しく寝ることだな」

気付いたら、転落防止用の柵に手を掛けていた。

あのまま同僚に声をかけられなかったら、正体をなくして目の前の柵から身を投げ出していたかもしれない。

自分自身が怖くて、無意識に俺は俺を殺そうとしていたのだ。

同僚に助けられた、と思った。

——つまり、この時の俺は、のちに何故あの時死んでおかなかったのだろうかと後悔することを知らない。

三話（前書き）

二度目の悪夢を見た。

——俺はこんなことのために力を手に入れたんじゃない。

後藤は打ちひしがれる。

三話

その日の夜、俺はまた夢を見た。

前回と同じ夢。

そして、前より少しだけ意識が明瞭になっている。

五階建てのマンション。

こじんまりとしてはいるが、意図的に緑も多く配置されており清潔感がある。

マンションは玄関口のセキュリティもしっかりしていて、キーがないと入れないシステムになっている。

俺は姿を消して、ガラスの扉を突きぬけた。

205号と表示された部屋に侵入する。

誰もが寝静まる時間帯、俺は誰かを探している。

微かに聞こえる寝息。

俺は気配を消して誰かに近づいた。

見れば白髪の老女、齢60ぐらいだろうか。

しかし、俺は確かにその人に見覚えがあった。
忘れもしない。

小学3年4組担任。舟木蓉子先生。

年をとり皺の増えたその顔には、大好きだったヨウコ先生の面影が微かに残る。

何故子供は大人と結婚できないのだろうか、一時期は真剣に悩んだことすらある。

俺は、触手を伸ばす。

——やめろ！俺はこんなことのために力を手に入れたんじゃない！

俺は夢の中の俺に叫ぶ。

ふと、感じてしまったのだ。俺の中にある、……殺意を。

しかし、俺は止めない。

気づけば、ヨウコ先生の首に触手をかけ、絞めていた。

夢だ、これは夢なんだ、と自分に言い聞かせても、罪悪感はぬぐい去れない。

俺の思いを無視するかのように、残酷な映像はその後も長く続く。

ヨウコ先生を“取り込み”終えたところで、その夢は途切れた。

大量の汗が額から滝のように流れている。

シャツもシャツもびしょぬれになっている。俺は家の三面鏡を覗きこんだ。

顔は恐怖で引き攣り、まるで血そのものが通っていないかのようにすら思える。

その色は不気味に青白く滲んでいた。

見たこともないような表情が鏡に映っている。

もともとどういう顔をしていただろうか、俺は分からなくなった。

嫌な記憶を消し去ろうと、テレビをつけた。

今何時なのか？そんな日常的で平凡な疑問に答えを出すことで、平常心を取り戻したかったのかもしれない。

5時58分。画面には笑顔を浮かべた朝のニュースキャスターが映っている。

思わずぞっとして、テレビのチャンネルを消してしまった。
テレビの中の、彼、そして、彼女が、食べ物に見えたからだ。

俺は驚愕した。そして、あるひとつの可能性について考えずにはいられなかった。

あれは夢なんかではなく、現実かもしれない。

俺は確かに人間を食べていて、そして、また、誰かを食べようとしている、と。

そして、俺は“それ”の味を覚えてしまっていて、今、テレビの中の人間を「おいしそう」と感じてしまっていた。

まだ、夢の続きを見ているんだろう。俺は深呼吸をしながら、気持ちを落ち着ける。

汗だくになったシャツを脱ぎ、洗面台に向かう。

顔を洗おうと蛇口を捻るが水は出てこない。

今日は息子弘樹の保護者参観だというのに。なんと幸先の悪いことだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1493w/>

肉体はつかれない

2011年10月9日14時42分発行